

専修大学
創立130年
記念企画
第01回

日本を変える、
世界を動かす!

社会知性のチカラ

The Potentiality for "Socio-Intelligence"

実学を重視する日本初の私学として

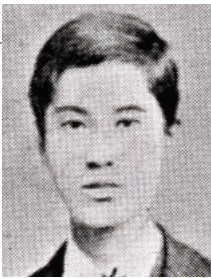
二三年前の建学精神、脈々。 社会に問う経済と法の原点。

専修大学は今、「社会知性の開発」を二世紀ビジョンとして掲げ、人材育成に取り組んでいる。四人の創立者とその建学の精神を受け継ぐ卒業生たちに焦点を当て、「社会知性」のチカラを二三回シリーズで紹介していく。

02

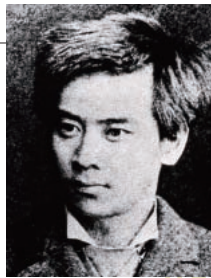
専修大学は今年創立一三〇年を迎える。数ある大学のなかでも日本有数の歴史を誇り、実学に重きを置いて高等教育に取り組んできた同学が今、次代を担う人材育成の柱として掲げているのが「社会知性の開発」だ。

専修大学を 創立した 4人の 若き獅子



目賀田種太郎

1853年幕臣の家に生まれ、国費留学生として17歳で渡米。ハーバード法律学校（現ハーバード大）卒業後、留学生監督を務める。



田尻稲次郎

1850年薩摩藩士の家に生まれ20歳で渡米。エール大学と同大学院で経済、財政を学ぶ。大蔵次官、会計検査院長、東京市長を歴任。

シリーズ初回の今回は日高義博学長をナビゲーターに「社会知性」とは何か、そしてその根底に流れる建学の精神とはどのようなものかを紹介しよう。

次代を担う人材育成の柱 「社会知性の開発」とは

「社会知性とは、専門的な知識・技術とそれに基づく思考方法を核としながらも、深い人間理解と倫理観を持ち、地球的視野から、独創的な発想によって主体的に社会の諸課題に取り組んでいける能力です。私たちは社会知性を培う教育によって、将来日本の屋台骨を支えるような人材を育成しようとしているのです」（日高学長、以下同）

言い換えれば、社会知性とは「問題解決能力」に、「情報処理能力」「自己表現能力」「コミュニケーション能力」を加えた総合的な知力を指す。同学がこれを掲げた背景には、今社会が大きく変化し、さまざまな価値観が崩壊しつつあるという現実がある。社会知性を生かし、新たな規範を築くことのできる人材が求められているのだ。

「社会知性の開発は、二一世紀ビジョンとして策定された新たな教育の柱ですが、何もないところから突然出てきたわけではありません。その根底には、今日と同様、社会の枠組みが劇的に変化した明治という時代に建学した、創立者たちの精神が脈々と流れています。変革に直面した彼らは、新たな国のかたちをつくる人材を育成しようと考えたのです」

専修大学の歴史は一八八〇（明治一三）年開校の「専修学校」から始まる。創立者は、明治維新後間もなく米国留学した若き元武士たち。相馬永胤、田尻稲次郎、目賀田種太郎、駒井重格の四人だ。国内では官軍と幕府軍、敵と味方の四人だったが、外から祖国を見れば日本人同士が争うなどばかりでいた。

「生い立ちも学んだ学校も異なる四人ですが、どうすれば日本という国を理想的な姿にしているかと問うたとき、高等教育によって社会を支える人材を育てなければならぬということ、考えが一致したのです」

互いに知り合った四人は、留学中から学校創立の計画を練った。そして相次いで帰国した一八七九（明治一二）年から、本格的に創立準備が始まった。「当時、彼らが学んだ法律や経

一三〇年前、 日本で初めて、 経済学と法律学を

日高義博

(ひだか・よしひろ)

専修大学理事長・学長。同法科大学院教授。1970年専修大学法学部卒業。75年明治学院大学大学院法学研究科博士課程単位取得退学。専門分野は刑法学。法学博士。2004年学長就任。06年理事長就任、学長兼務となる。



——社会知性の体現と発信 各界で活躍する卒業生たち

専門教育の専修を代表する古久保氏は、判事として活躍中。「司法試験受験団体の正法会での議論とゼミで指導されたプラグマティズム法学という考え方は、今の仕事の基盤です」。実業界代表が、紀伊國屋書店前社長の乙津氏。「入社した動機は本好きだったから。本は居ながらにして古今東西を放ることが出来る。本を読み考えることで人は進歩する。現役学生ももって本を読み情熱を培ってほしい」。「専大時代に得た友人、スポーツ観戦を通じての一体感、留学や事業体験が、政治家としての根っこになっている」と回想するのは浜田防衛大臣だ。伝統芸能の世界でも卒業生が活躍中。「地方出身の友人の方言や、古文の先生に教わった伝統芸能の古典語は歌舞伎の芸の肥やしになりました」(河原崎氏)。スポーツで活躍するOBの筆頭は黒田投手。2009年には野茂投手以来、日本人で2人目の米大リーグ開幕勝利投手となった。経済キャスターの江連氏は「一般教養で得た経済の基礎や大学院で学んだ財政学が仕事の糧になっています」と当時を振り返る。

札幌地方裁判所裁判官

古久保正人

(1980年法学部卒業)

80年司法試験合格。83年に、東京地裁判事補として裁判官任官。以後、長崎、大阪等の地裁勤務、大津地裁彦根支部長、東京高裁判事等を歴任。現在は札幌地裁総務課判事。この間主として民事事件を担当。

紀伊國屋書店取締役副会長

乙津宜男

(1964年経済学部卒業)

64年紀伊國屋書店入社。75年熊本本店責任者として、お客を名前前で呼び評判に。主に仕入部門を歴任。06~08年、生え抜きとしては初めてとなる同社社長を務めた。好きな言葉は「人生は人、自然、本との出会い」。

防衛大臣、衆議院議員

浜田靖一

(1980年経営学部卒業)

専修大学卒業後、故渡辺美智雄氏の秘書、鈴木内閣の大蔵大臣秘書官等を経て93年衆議院議員選挙で初当選(現在通算5期目)。主に防衛、水産畑を歩む。08年防衛大臣に就任した。

歌舞伎役者

河原崎権十郎

(1981年文学部卒業)

人間国宝の17代市村羽左衛門の3男。61年に歌舞伎の初舞台を踏む。大学在学中も舞台出演と学業の二足のわらじを履き、後に、映画・テレビにも出演。88年名題昇進。03年に4代目河原崎権十郎を襲名。

ロサンゼルス・ドジャース投手

黒田博樹

(1997年商学部卒業)

専大野球部でエース。4年次に、東都大学1部リーグ昇格。97年広島入団。05年に最多勝、ゴールデングラブ賞、06年に最優秀防御率獲得。08年ドジャースにFA移籍。同年31試合に登板し9勝10敗、防御率3.73。

日経CNBCキャスター

江連裕子

(2003年経済学研究科修士課程修了)

経済学部3年次に『週刊文春』の「篠山麻衣子女子大生写真展」に登場。00年の卒業後、大学院に進み学業のかたわらフリーキャスターとして活動を開始。修士論文は「北欧諸国の租税政策—二元的所得税の研究」。



相馬永胤の留学中の日記。辞書1冊を懐に渡米し、体当たりで英語を習得した。



相馬永胤

1850年彦根藩士の家に生まれ20歳で渡米。コロンビア法律学校(現コロンビア大)卒業。エール大学法科大学院で法律、経済を学ぶ。



駒井重格

1853年桑名藩士の家に生まれ旧藩主とともに21歳で渡米。ラトガース大学で経済学を学ぶ。高等商業学校(現一橋大)校長も務める。

語で英米法を、司法省法学校ではフランス語でフランスの法律を教えていました」
これでは、ごく限られた一部のエリートしか法律を学ぶこと

済は最先端の学問でした。東京で法律を教えたのは東京大法学部と司法省の法学校だけ。しかも東大は英語で英米法を、司法省法学校で

このような理念に基づいて創立されたのが日本初の、日本語で法律や経済を学べる学校だった。決して裕福ではない青年たちが働きながら通えるように、また自分たちも実業界や政官界

確かな羅針盤を持って 社会に役立つ人材を

このように歴史を振り返ると、現代の専修大学の時代から旧制大学の復興の時代、大学拡張の時代、そして現在へと歴史が続いてきたのです。自らを大学改革の時代と位置づけた第五世代のわれわれは、骨太な大学改革によって、次代に歴史をつないでいか

なければならぬのです」
その柱となるのが社会知性の開発だが、一例としてはアジアとの連携を積極的に進めている。「私は『黒潮ライン』と呼んでいます。台湾、中国、韓国などの二〇大学と国際交流を行なっています。特に黒潮ラインの学術・文化交流は、本学のビジョンである社会知性の開発にとって重要です」
いまや社会知性は日本を超えて広がりつつある。では社会知性という専修大学のDNAを身につけた人々は、どのような活躍をしているのだろうか？ 創立者四人と左記の六人を皮切りに、一三週にわたり、各界で活躍する一三〇人を紹介する。

日本語で教える学校を 創ろうとした 男たちがいた。

ができない。彼らが目指したのは、近代日本の人的基盤を市民レベルから築くことだったから、それでは意味がなかった。「そもそも、日本人の価値観や意識を抜きにして国の骨格づくりはできません。それには日本語で、日本人の感性で物事を考えていく力を、身につけなければならなかったのです」

「専修大学の歴史は、決して平坦なものではありませんでした。たとえば戦後の焼け野原からの出発。このときの総長・今村方三郎先生は別荘も宅地も大学に寄贈し、私財を母校につき込んで再建の陣頭指揮を執られました。不思議なことに本学の歴史にはほぼ三〇年ごとに節目があり、しかも節目ごとに支える人たちがいた。そのような人々のつなぐ力によって、第一世

代専修学校の時代から旧制大学の時代へ、さらに新制大学の復興の時代、大学拡張の時代、そして現在へと歴史が続いてきたのです。自らを大学改革の時代と位置づけた第五世代のわれわれは、骨太な大学改革によって、次代に歴史をつないでいか



田尻福次郎先生の講義風景。英語やフランス語の原書が教科書として使われるのが一般的だった時代に、日本語で法律と経済が学べるようになって、当時の青年たちの注目を集めた。